

貴重書紹介

アンドレアス・ヴェサリウス
『人体の構造についての七つの書』
1543年，バーゼル，オポリヌス書店刊

鈴木 秀子*

Vesalius, Andreas, 1514-1564

Andreae Vesalii Bruxellensis, scholae medicorum Patauinae professoris, De
humani corporis fabrica libri septem

Basileae : [Ex officina Ioannis Oporini] , [Anno salutis reparatae 1543, Mense
Iunio]

[12], 659 (i.e. 663), [37] p. : ill. (woodcuts), port. : 42 cm. (Fol.)

Includes index

Includes errata list

Publication data from colophon

Pages 313-491 are misnumbered 213-391; 662-663 are misnumbered 658-659

Signature: \star^6 , A-Z⁶, a-l⁶, m⁷⁺², n-o⁶, p⁴⁺², q-z⁶, Aa-Ll⁶, Mm⁸

Signature “m” contains 7 leaves (8 leaves lacking m_6) plus a double-leaf
(marked “m3”, page “313”) inserted before m_3 (second m_3 unpaginated);
signature “p” contains 4 leaves plus a double-leaf (marked “p₄”, pages “353”
and “354”) inserted before p_4

*すずき・ひでこ / 整理課

はじめに

アンドレアス・ヴェサリウス (Andreas Vesalius, 1514-1564) は、27歳の若さで著したこの『人体の構造についての七つの書』(De humani corporis fabrica libri septem) によって“近代解剖学の父”と呼ばれている。自然科学におけるルネッサンス最盛期に刊行されたこの書物は、その後の医学の発展にはかりしれない貢献をなした。奇しくもこの書が刊行された1543年は、ニコラウス・コペルニクス (Nicolaus Copernicus, 1473-1543) の遺著『天体の回転について』(De revolutionibus orbium coelestium)、すなわち“地動説”が公にされた年でもある*。マイクロコスモス(小宇宙)としての人間と、マクロコスモス(大宇宙)としての天体の謎を解く二冊の書物が偶然同じ年に刊行されたことから、この年1543年を以て、近代科学史の紀元とするともいわれている。日本に眼を転ずると、1543年は天文12年にあたり、ポルトガル商船が種子島に漂着、鉄砲を伝来した年であり、日本人が初めて直接西洋文化に触れた年である。そして、杉田玄白、前野良沢らが苦心してオランダ語より訳した、通称『ターヘル・アナトミア』(Tafel anatomia) と呼ばれる解剖図『解体新書』が出版されたのは、それから約230年後の1774年(安永3年)8月、さらに長崎の通詞本木良永によるオランダ語からの訳書『天地二球用法』によって“地動説”が日本に紹介されたのも同年同月であった¹¹⁾。

1 ファブリカ(初版)の書名とその構成

1.1 書名

扉絵の題字には、
“ANDREAE VESALII/ BRVXELENSIS, SCHOLAE/ medicorum
Patauinae professoris, de/ Humani corporis fabrica/ Libri septem ”(斜線は改行を示す)とある。

*実際には1530年にはほぼ原稿を完成しており、ウイッテンベルクのレティクスがコペルニクスを説得してようやく出版を認めさせたという。(『西洋をきざいた書物』J.カーター, P.H.ムーア, 雄松堂, 1977)

直訳すれば“パドヴァ医学校教授であるブリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウスの人体の構造についての7つの書”となるだろうか。

書名の『De humani corporis fabrica libri septem』の“7つの書”にあたる“libri septem”の“libri”は書物や文書などの意味のラテン語 liber の複数形だが、この場合、物理的単位の“本”ではなく、巻(まき)または編、篇、あるいは部に該当し、一冊の内容が7篇に分かれていることを示している。邦訳される場合『人体の構造についての7つの書』または『…七つの本』『…七つの章』あるいは、“libri

『ファブリカ』の扉絵

septem”の部分省いて『人体の構造について』『人体構造論』などに訳されている。英訳では“Book”だが、これには、もともと、巻、篇といった意味が含まれている。またこの書物は通称『Fabrica』(ファブリカ)と呼ばれており、本稿でもこの通称を用いた。

1.2 構成と内容

扉絵(これについては後述する)をめくると、巻頭文として神聖ローマ皇帝カール5世への献呈文(1542年、パドヴァにて、8月1日付け、3葉)続いて刊行者であるバーゼルのオポリヌスへの手紙(1542年、ヴェネチアにて、8月24日付け、1葉)が載り、その次にヴェサリウス自身の木版肖像画が載る。女性の上半身を解剖しているところである。解剖台の手前左側面に“AN. AET. XXVIII”(生年28)、彼の右手をはさんで、同じ側面の右側に“MDXLII”(1542)と刻まれている。

献呈文、手紙、本文の篇や章の始まりは、豚を解剖したり、鍋で骨を煮て骨格標本を作っているプットー*の絵をあしらった、少々グロテスクな意匠の大小の装飾頭文字から始まっている。

出版を急いだためだろうと推定されているが、ファブリカ初版のページ付けは大きく乱れている。しかし、これは単純な間違いであり、本文の内容に影響はない。312ページの次に100ページほど戻って、213ページが来る。そしてそのまま391ページまで続く。その次は、一気に492ページにとぶので、全体としてのページ数は帳尻が合う。また、最後の658から659ページは662 663ページに相当する。

各部篇の内容は、第1篇(全40章)骨と軟骨、第2篇(全62章)筋肉と靭帯、第3篇(全15章)静脈と動脈、第4篇(全17章)神経、第5篇(全19章)消化器官、泌尿器官、生殖器官、第6篇(全16章)心臓と呼吸器官、第7篇(全19章)脳と感覚器官、となっているが、各部篇の配分はかなり偏っており、第1篇と第2篇のみで本文全体の半分以上(p. 356まで)を占める。

*絵画・彫刻の装飾に使う裸のキューピッド。

16世紀，17世紀に刊行されたラテン語の書物のタイトル頁には冗長なタイトルが記されていることが多いが，ファブリカにはこのような長いタイトルはなく，上記のタイトルと刊地，および皇帝とヴェネチア議会の出版特許状の書かれた扉絵があるのみだが，それでも各部篇にはラテン語の長いタイトルがつけられている。

『人体解剖のすべて：解剖学への招待』（坂井建雄，日本実業出版社，1998）の中に，ラテン語から日本語に直接訳した各部篇（巻）のタイトルが掲載されているので，ラテン語で書かれた原著の雰囲気伝えるためにも，ここに引用させていただく。

第1巻 この巻は全身を支えて保持するもの，またあらゆるものを安定させかつ固着させるものに充てられている

第2巻 この巻はあらゆる腱（靭帯）に，また随意かつ我々の意思に従う運動の器官としての筋肉に充てられており，またこの巻に属する図版のほとんどは，各章の本文の前にいまあるような配置で，図解してある

第3巻 この巻は静脈と動脈の身体全体の系列を叙述し，その独自の図版はそれらにふさわしい章の前に掲げる

第4巻 この巻は神経だけを扱い，その特有の図版はそれにふさわしい章の前に示す

第5巻 この巻は食物と飲食によって作られる栄養の器官〔消化器〕と，またそれから諸部分が連結され近接しているために，生殖に役立つ器官〔生殖器〕に充てられる。この巻に特有のすべての図を順次にまた同時に，すぐ巻頭に掲げている。同じ図が，ここかしこで非常に多くの章の前に置かれることにならないように

第6巻 この巻は，心臓とそれに役立つ器官に充てられ，すぐ前に本巻に固有の図を掲げる，ここでもまた同じ図がここかしこ各章の前に置かれなくてもよいように

第7巻 この巻は、動物性機能の座としての脳と、感覚器官について扱う。
そしてその初めの部分にその特有のほとんど全ての図版をすぐ前の
二章と同様に例示する。

ファブリカ本文には、この書物を有名にした木版の解剖図が約300ほど
挿入されているが、この部篇のタイトルほとんどに、それらの図版の位置
が示されていることからわかるように、ヴェサリウスは図版の配置に非常
に気を使っている。

前掲書『人体解剖のすべて』によると、現代の人体解剖の教科書は、人
体の構造をすべて枚挙網羅するということを前提として「系統解剖学」と
「局所解剖学」という二つの枠組みのいずれかで書かれている。「系統解剖
学」とは、人体の構造を機能および由来によって器官系に分類していくも
の（骨格系、筋系、消化器系、呼吸器系、泌尿器系、生殖器系、内分泌系、
循環器系、神経系、感覚器系等10種程度にわけ）で、「局所解剖学」と
は、人体の構造を部位ごとに扱っていくものであり、この枠組みからファ
ブリカを考えると“ファブリカ全7巻の構成は、はじめの4巻が骨格、筋、
血管、神経という順に、全身に広がる構造を素材ごとに分けてシステムと
して扱い、後の3巻が、そこからはみ出た構造を、腹部、胸部、頭部とい
う順に部位ごとに分けて扱うという折衷的な構成”であり、ヴェサリウス
以前にはこの二つを合わせたものは存在しなかったとされている。そして、
ファブリカが後世に与えた影響は、ヴェサリウス以前以後というふうに分
けられるほど大きく、ファブリカの構成様式は、その後、いくつかの解剖
学書に形をかえてあるいはそのままに受け継がれていくのである。

ファブリカの230年後に刊行された『解体新書』の原著『クルムズ解剖
書』(1734, アムステルダム刊)の付図も、その出所をたどっていくとファ
ブリカの解剖図に行き着くという¹¹⁾。

本文の後には正誤表があり、巻末にはアルファベット順の索引がつけら
れている。この索引にもアルファベットの装飾頭文字が使用されており
(Xのかわりにギリシャ語のΞ(Ksi)が使われている)、索引の最終ページ
の下方には、使用した折記号の一覧が載っている。

ファブリカの校合式は冒頭の目録の注記に書いたが、この校合式ではわ

かりにくい折込みの挿図については、その下の注記で表した。“ m_3 ”と折記号のついた折込の紙葉 (double-leaf, p. 313) の次にある、頁付けのない“second m_3 ”の紙葉は、片面印刷で8つの内臓器官が印刷されており、これを切り抜いて、直前の折込紙葉の人体図に貼り付けられるようになっている。このような趣向はファブリカの要略本である『エピトメー』にもあるが、この紙葉がもともと存在しない版もある¹。明大所蔵版には、折込の紙葉もその次の片面印刷の内臓器官図も存在している。

刊記は奥書 (Colophon) に、“BASILEAE, EX OFFICINA IOANNIS OPORINI, Anno salutis reparatae MDXLIII, Mense Iunio”(パーゼルにて、ヨハネス・オポリヌスの印刷所により、1543年6月刊行)と記されている。

最終ページにはこのオポリヌス書店のプリンターズ・マークである、海豚(といっても現実のいるかとはかなり異なるが)に乗って豎琴を奏するアリオン[†]の木版画が描かれており、画の周りには、“INVIA VIRTVTI NVLLA EST VIA”(徳にとってはいかなる道も通れずということなし)[‡]と記されている。

ヴェネチアで彫られ、アルプスを越えてパーゼルのオポリヌスの元へ送られたファブリカ解剖図の版木は、1555年の第2版刊行の際に再作成された扉絵、修正を加えられたガイド・レターなどを含んで、オポリヌスの死後、パーゼルのフローベン家を始め、幾人かの印刷業者の手にわたり、書籍印刷の歴史に何度か顔を現す。そして、1893年にミュンヘン大学の図書館に収蔵されていたところを発見された。その後、第2版の扉絵の版木のみは人手にわたり、ルーヴァンの図書館に収蔵された。そして、経緯は不明だが、1932年に、ファブリカの要略本である『エピトメー』の版木も含んで、ミュンヘンの図書館で再発見される。おおよそ277あったはずのオリジナルの版木の内、50点ほどが失われただけであった²。残念ながらヴェサリウスの肖像画は含まれていない。1934年には、これらオリジナルの版木から起こされた図版が『Icones anatomicae of Andreas Vesalius』としてニューヨーク医学アカデミー (New York Academy of Medicine)

[†]B. C. 7-6世紀の有名な叙情詩人、海豚に救われた話が有名である。(『ギリシャ・ローマ神話』トマス・ブルフィンチ、角川書店)

[‡]出典はオウィディウス『変身物語、XIV』(『ギリシャ・ラテン引用語辞典』岩波書店)

とミュンヘン大学図書館より共同刊行された。しかし悲しむべきことに、この貴重なオリジナルの版木は第二次大戦の戦火により、ミュンヘンで破壊されてしまうのである。

2 ヴェサリウスの生涯と著作

ヴェサリウスは、1514年12月31日、現ベルギーの首都ブリュッセルで生を享けた。祖先がライン河畔のドイツ領 Wesel 地方に住んでいたことから、ヴェサリウス姓 (van Wesele) を名乗るようになったといわれている。Vesalius という名前はこの Wesele のラテン形である。(ドイツ風綴りのラテン形なら Wesalius あるいは Wessalius か)。父親もアンドレアスという名で、神聖ローマ皇帝カール5世に仕える宮廷薬剤官であった。一族はハプスブルク家とのかかわりが深く、この縁から、後年カール5世の侍医となる。家系には医者や学者が多くでており、代々宮廷侍医を勤める者が多かった。また祖父エヴェラルド (Everard) はアラビアの医者ラーゼス (Ar-Rāzī, ラテン名 Rhazes, 865?-925?) やヒポクラテス (Hippocrates, B. C. 469-399) の注釈書を著している。医学を志すものの家庭環境としては、まことにめぐまれたものであった。少年時代についてはあまり知られていないが、母の名はイサベラ (Isabella Crabbe) といい、宮廷薬剤官として不在がちの父にかわり、一族の伝統を伝えるため、子供の教育にあたったようである。後年の成功はこの母の影響が大きいともいわれている。家には代々収集した多くの蔵書があり、少年時代から読書に親しむ生活を送っていた。兄弟姉妹の数は不明だが、フランシスクス (Franciscus) という名の弟がいて、やはり医学を志して北イタリアのフェラーラに留学している。

2.1 ルーヴァン大学時代

初等教育は郷里で受けたと推定されているが、その後、15才でルーヴァンの大学に入った (1530年2月25日, “Andreas van Wesel de Bruxella ” という名で入学を許可された学生の記録が残っている)。ルーヴァン大学はエラスムスなどが学んだ伝統ある大学で、ここで、ラテン語、ギリシャ語、数学、哲学、修辞学などを修めた。

最初、城塞学校 (Pedagogium Castrense) と呼ばれる学寮に入った。ここでアリストテレスの『靈魂論』 (De anima) の注釈などを学んだことなどが、ファブリカの中で回想されている。

1531年には、やはりルーヴアン大学の学寮の一つである3言語学寮 (Collegium Trilingue) に移った。この学寮の教育方針は真理の探究のための入り口となる3つの重要な言語、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を教授することであった。ヴェサリウスは、伝統的なキケロふうのラテン語の教育を受け、ラテン語ほどではないがギリシャ語を学び、ヘブライ語はあまり習得しなかったようである。また、古代医学は12世紀頃までにアラビア圏経由でヨーロッパに入ってきたこともあり、ラーゼス、アヴィケンナ (Ibn-Sina, ラテン名 Avicenna, 980-1037) に代表されるアラビア医学の伝統も大きかった。数年後アラビア語の習得も試みており、ラーゼスの著作の注釈書を刊行している。

一族の伝統を受け継ぎ、はっきりと医学を志したのはこの頃であろうか、1533年9月 (18歳) ヴェサリウスはパリ大学医学部に入学した。

2.2 パリ大学時代

パリ大学では、解剖学者シルヴィウス (Jacques Dubois, 1478-1555, ラテン名 Jacobus Sylvius), 解剖学と外科の教授, ギュンター・フォン・アンデルナッハ (Gunter von Andernach, 1505-74, ラテン名, Johannes Guinterius) らについて学んだ。当時北ヨーロッパではパリ大学の名は有名であり、パリ大学への入学は自然な選択であったと思われるが、大学の医学教育そのものはイタリアのそれと比較すれば保守的であった。

当時の西洋医学は、依然として、ローマのギリシャ人医師ガレノス (Claudius Galenus, A. D. 125-199) の影響下にあった。ガレノスはヒポクラテスを含め、それまでのギリシャ医学を集大成し、自らの観察や実験によって発展させたローマ帝政期最大の偉大な学者であり、その後1500年にわたって影響力を保った。しかし、その医学には多くの誤りを含んでいた。ヘロフィロス (Herophilos, B. C. 300頃) やエラシストラトス (Erasistratos, B. C. 340-250) によってアレクサンドリアで行われていた人体解剖は、ガレノスの時代にはほとんどなされなくなり、せいぜいサルまで

であった。また、ガレノスは“4体液説*”“生命精気†”の存在を信じていた。致命的な誤りは血液の流れに関するもので、これが正されるには、解剖学に続く生理学の時代であるといわれる17世紀のハーヴェイ(William Harvey, 1578-1656)の“血液循環説”まで待たねばならない。

主としてアラビア圏経由で西ヨーロッパに輸入されていたガレノスやヒポクラテスなどの古代医学は、16世紀になってようやく本格的にギリシャ語原典からラテン語へと直接の翻訳がなされるようになった。しかし、文献学的にはルネッサンスといえるかもしれないが、観察科学としてはまだまだ遅れていた。人間は神の創造物であり、解剖は神への冒であるというキリスト教による宗教的制約もあるだろうが、ガレノスらの古典を解釈するだけの講義、また稀に解剖はあっても、教授たちは高い壇の上から指図するだけで、実際の解剖は学者のすべきことではないとして、理髪師または位の低い外科医がおこなっていたという。

これらの講義に失望を募らせたヴェサリウスは、自らの眼によって観察することからその研究の基礎を築いていく。研究のために小動物の解剖も行ったであろうが、その他に、学友たちとたびたびパリのイノサン聖堂付属の墓地に行っては、風雨にさらされた骨を長い時間観察した。この古い墓地にはかつて猛威を振るった黒死病(ペスト)の犠牲者たちが多く葬られていた。そして自分の知識がどれほど正確か試すために、友人たちと眼を閉じたまま手を触れるだけで、30分以内にその骨が何の骨だかあてる賭けをしたという。ヴェサリウスの解剖学はファブリカが骨から書きおこされているように、まず骨学から始まったのであった。

2.3 ルーヴァン時代

パリ大学で3年ほどすごした後、1536年、大学を去り、ルーヴァンに戻る。皇帝カール5世とフランソワ1世の間での戦争勃発がその理由である。この間、郷里ブリュッセルで検死解剖を見学したり、またルーヴァン市外

*4種の体液の釣り合いによって健康と病気が分かれ、人の気質も各体液の関係できまるとする(多血質、粘液質、胆汁質、神経質)(『医学の歴史』小川鼎三、中公新書、1964)

†宇宙にみなぎる pneuma (精気)が呼吸によって体内に入り、あらゆる生活現象を支配するという説(同上)

の絞首台から夜陰にまぎれて罪人の骨を盗みだし、少しづつ家に運び込んで骨格標本を組み立てたりした。

1537年の2月、学士号を取得するため、アラビアの医者ラーゼスの注釈書『ラーゼスの「マンスールの書」[‡]に関する第九巻の注釈』(Paraphrasis in nonum librum Rhazae medici Arabis clariss. ad Regem Almansorem...)を著し、ルーヴァンで刊行した。そして同年の3月にはこの第二版がバーゼルで出版された。

2.4 パドヴァ大学時代

1537年、バーゼル経由でヴェネチア共和国のパドヴァに行き、パドヴァ大学に入学した。パドヴァ大学は1222年にボローニャ大学の分校として創立して以来、人文科学のみならず自然科学におけるルネッサンスの最前線にあった。早くも同年の12月にはパドヴァ大学で医学終了の試験を受け、優秀な成績でドクトルの学位を取得する。その翌年には、22才の若さでパドヴァ大学の外科と解剖学の教授となる。パドヴァでは、解剖の機会もパリ時代より格段に多く、学者として最も充実した5年間を過ごした。

1538年には、ファブリカの序曲ともいえる、解剖図6葉を収めた『解剖学6図譜』(Tabulae anatomicae sex, 以下『6図譜』)[§]をヴェネチアのヨハネス・ステファヌス書店より刊行した。この時代まで、医学のテキストに詳細な図がつくことは稀であった。むしろ古代にはなかったこととして排斥されていた感がある²⁾。ヴェサリウスの『6図譜』は、実際的な必要性、つまり学生たちへの講義の便宜から生まれたようである。ヴェサリウスが描いて講義に使用したところ、非常に好評であったが、学生たちに模写された下手な図が広まったので、自身これを出版することになったという。血管系と内臓を描いた前半の3図をヴェサリウスが描き、後半の骨格図3図を、同郷のフランドルの画家でティツィアーノの工房にいたヤン・ステファン・ファン・カルカール(Jan Stefan van Kalkar)が描いたと最初のパラグラフで述べている¹⁾。

[‡]マンスールに献じられた医学書』(Liber medicinaris ad Regem al-Mansorem)内容は、頭から足に至る病気の兆候、臨床経過、治療に関する組織的な叙述である。(『アラビア文化の遺産』ジクリト・フンケ、みすず書房、1982)

[§]これは、最初タイトルなしで出版されたが、今ではこの名で知られている。

このような解剖図は、学生のほかに、解剖を行う理髪師や、病人のつきそいをする人などのために存在したもののだが、『6図譜』はそれまでのものより、格段に正確だったのであろう。ヨーロッパ各地で海賊版が出されたことが物語っているように、大きな反響があり、実際よく利用されたようで、現存するヴェサリウスの完全なオリジナル版はわずか2セットであるという。

この後、ファブリカの刊行にいたるまでにヴェサリウスは2冊の本を出版した。

一冊めはパリ大学時代の師であるアンデルナッハの『ガレノスの見解にもとづく医学生のための解剖学教程』(Institutionum anatomicarum secundum Galeni sententiam ad candidatos medicinae libri quatuor, 1536, バーゼル刊)を自ら改訂して、1538年にヴェネチアのベルナルディヌスから出版した。この初版が出版されたとき、ヴェサリウスはまだ彼のもとで学んでおり、その中には、“Andreas Wesalius”の綴りで彼の学業優秀なことが述べられているという。

2冊めは『瀉血書簡』(Epistola, docens venam axillarem dextri cubiti in dolore laterali secandam)で、1539年にバーゼルのロベルティ・ヴィンテルから出版した。古代より瀉血はスタンダードな治療法であったが、当時は瀉血の位置などについて学者や医者の中で活発な論争がおこなわれていたのである。これに対しヴェサリウスは自らの解剖学の実践においてその所見を述べている。

その他にヴェサリウスの仕事として、1539年に、有名なヴェネチアのジュンタ(Giunta)書店の企画した完全版『ガレノス全集』(Galenii omnia opera)(1541刊)の仕事に加わった。監修には、著名な医者モンタヌス(Joannes Baptista Montanus)が選ばれ、医者であると同時に第一級の古典学者であるガダルディヌス(Augustinus Gadaldinus)が補佐している。ガレノス全集の仕事に関して、若いヴェサリウスの携わった部分のごく一部であつたらしい。この仕事の依頼がきたとき、ヴェサリウスはおそらくファブリカの執筆にとりかかっていたらと推定されている。1543年に刊行されたファブリカの膨大な仕事量から考えての推定である。またこの仕事に喜んで参加していることから、ファブリカが結果的にガレノス説

をくつがえすことになったとしても、ヴェサリウス自身はガレノスを尊敬し、その著作を徹底的に研究したのであると思われる。しかし、その一方『エピトメー』の献辞の中では、ガレノスについて“彼は人間の体には一度も手をつけたことがなく、人間よりも猿の体の構造をもとに、無数の個所において人間のとは異なる器官を記述した われわれに押し付けたとは申すまい⁶⁾”とはっきり書いているのである。

2.5 ファブリカとエピトメー

パドヴァに来て5年目の1542年、27歳のときに、不朽の名著ファブリカを完成した。カール5世への献辞の日付が1542年8月1日となっていることから、同年8月には原稿を完成していただろうと推定されている。原稿作成期間は4年足らず、あるいは3年ほどであろうか。その要略本『エピトメー』(Epitome)もその後すぐに完成した。Epitomeとは“梗概”“要略”というような意味だが、ファブリカの簡略版というより、『解剖学6図譜』のように、学生の勉学のために書かれたもので、ファブリカを“上級篇”とすれば“入門篇”にあたるものである。(実際、エピトメーの方がよく売れたようである)このエピトメーの献辞は、カール5世の息子フェリペ2世に捧げられている。

ファブリカの原稿はほとんどが、先にパーゼルのオボリヌスのもとへ送られていたようだが、ファブリカとエピトメーの膨大な挿図の版木は、ヴェネチアで彫られ、同年秋には、ミラノの商人ダノニ(Danoni)に託されてアルプスを越え、オボリヌスの元へと送られた。

ファブリカに載っているヴェサリウスのオボリヌスへの手紙によれば、ヴェサリウスはこの版木を送るに際して、その版木が破損することなく無事パーゼルに届くよう、その梱包や安全に心を砕いている。また、その図がテキストの間に正しく、わかりやすく配置されるよう、活字の種類にいたるまで、こまやかな配慮と指示をしている。ファブリカの価値は、そのテキストだけでなく、また単なる挿絵ではない、すぐれた解剖図とテキストの結合にある。そのことは、ヴェサリウス自身、大いに自負していたと思われる。オボリヌスへの手紙の文面から、挿図とテキストとのクロス・リファレンスの作成に対する彼の熱意が伝わってくる。

翌 1543 年になって、パーゼルへ赴き、その校正刷りを読む作業に参加している。ファブリカの刊記には 1543 年 6 月刊行とある。その日付に従えば版木が送られてから完成まで約 8 ヶ月かかっていることになる。ファブリカ完成後の 8 月、カール 5 世が滞在していたドイツのシュパイヤー (Speyer) に行き、おそらくその地で皇帝にファブリカが献上されたと推定されている。普通の紙ではなくヴェラムに印刷され、豪華な装丁をほどこしたエピトメーが一冊、第一次大戦で破壊されるまでルーヴァンの図書館の宝として保存されていた[¶]。おそらくファブリカと共に皇帝に献上されたものであると信じられてきたという。

ファブリカの刊行は、大きな反響を巻き起こしたが、当然ながら、非難もあった。これは正確に解剖の結果を述べることを目的としたヴェサリウスの解剖学が、ガレノス説と一致せず結果的にその批判となっていたからである^{||}。特に激しい非難をあげたのは、パリ時代の師シルヴィウスであった。シルヴィウスは、ヴェサリウスの名をもじって “Vesanus” (気ちがい) と呼んだという。このような反対者たちは、どうしても事実を認めざるを得ない場合は、人間が墮落したために、古代とは人体の構造も変わったとまで言ったのであった。しかし、全体として見れば、好意的に迎えられたというべきであろう。比較できないかもしれないが、解剖学の発達でガレノス説を乗り越えていくさまは、シナ伝来の “五臓六腑説” が支配していた日本にあって、事実を追求する医者たちの努力によって次第にくつがえされていく様子をも彷彿とさせる。

[¶] 『A bio-bibliography of Andreas Vesalius』 Harvey Cushing (New York, 1943) しかし、『図書館炎上：二つの世界大戦とルーヴァン大学図書館』(W. シヴェルプシュ, 法政大学出版局, 1992) によれば、戦火で失われたのは、幼少の頃ルーヴァン大学の教授に養育されたカール 5 世が送ったファブリカであるとされている。エピトメーであったのかファブリカであったのか、はっきりしない。

^{||} ヴェサリウスはレノス説の中に 108 の間違いを見つけたとされている。(Antiquarian books : a companion for booksellers, librarians and collectors, Bernard Phillipa (ed.) Scholar Press, 1994)

2.6 ファブリカ以後

ファブリカに載せられたヴェサリウスの肖像画の解剖台のさらに下方に，“OCYVS **，IVCVNDE ET TVTO ”(敏速に，愉快地に，そして安全に)という言葉があり，ヴェサリウスの座右の銘ともいわれている。これは紀元前120年頃ブルーサで生まれ，ローマで成功した医師，アスクレピアデス(Asclepiades)の言葉^{††}からとった警句といわれている。

この言葉が，28歳当時のモットーだとして，では，その後のヴェサリウス自身の生涯はどうであったろうか。

ファブリカ刊行という大事業を成し遂げたその翌年，学者として前途洋々たるまさにその時，あっさりとパドヴァ大学教授職を辞し，彼の一族の伝統であった宮廷侍医になるのである。この転身については，一族のハプスブルク家とのかかわりであるとか，ファブリカに対する非難から身を守るためであるとか，さまざまな憶測がなされてきた。真相はわからないが，一族の伝統も当然あるだろうし，また“宮廷侍医”という地位は，大学教授と比較しても決して低いものではなかっただろう。また，当時の宮廷侍医とは，その言葉の響きとは裏腹に，戦争が起これば従軍する“軍医”でもあった。カール5世の“痛風の治療”をしながら晩年を過ごしただけでなく，外科医としての実践の道でもあったのである。そう考えると，“敏速に，愉快地に，そして安全に”という医者としての治療のモットーが，後半生において実践されたとも考えられる。

後半生の著作としては，当初，刊行が目的ではなく書かれたものとして『シナの根の手紙』(Medici Caesarei epistola, rationem modumque propinandi radicis Cynae decoti, ...,1546，バーゼル刊)がある。これは，皇帝が痛風の治療に用いたシナの根の効用について，友人に宛てた手紙であるが，後半はシルヴィウスとの論争について書かれており，弟のフランシスクスによってバーゼルのオボリヌスから出版された。

続いて，増補改訂版であるファブリカ第二版(1555，バーゼル刊)を刊

** 解剖台に刻まれた文字は“OCYVS ”と読めるが，意味から推測すると“OCIVS ”のことか。

†† “患者を治療するときは，‘安全に，すみやかに，痛みを与えず’ ”がアスクレピアデスの治療法における基本原則であった。(『図説医学史』マイヤーシュタイネック，ズードホフ，朝倉書店，1982)

行した。第二版は本文 824 ページで、初版より 160 ページ以上も増えている。図版の数も増え、初版より紙の質なども立派になっている。また、細部は異なるが、初版とよく似た構図の扉絵（ヴェサリウスの肩書きはパドヴァ医学校教授からカール5世の侍医に変わっている）が再作成されている。内容的には、外科医として研鑽を積んだ成果を活かし、初版の訂正や内容の組替えなどを行っている。従って医学のテキストとしては第2版のほうが優れているともいえる。

ヴェサリウスの後半生においては、著作として、ファブリカに匹敵するような仕事はないにせよ、優秀な外科医として様々なエピソードを残している。

1548年の12月、ヴェサリウスに診察を受けて、その死期を予言され、身辺整理をするようにいわれたある伯爵が、豪奢な宴会を開いて友人たちを招待した。そして、取り乱すことなく平静な態度で彼らにいとまごいをした。その後、彼は寝室に行き、ほとんどまさに予言どおりの時間に亡くなったという伝説めいたエピソード²⁾。あるいは、1562年4月には、少女を追いかけて落ちて階段から落ち、頭を打ったフェリペ2世の長男、ドン・カルロスを、頭部の外科手術によって奇跡的に死から救ったことなどが知られている。

2.7 エルサレム巡礼とザンテ島での客死

ヴェサリウスの死はさらに伝説につつまれている。1556年、カール5世は持病の痛風の悪化により退位した。皇帝侍医として、また外科医として名声が上がったヴェサリウスはその後、カール5世の息子フェリペ2世の侍医となる。だが、1559年、フェリペ2世がその宮廷をブリュッセルからマドリッドに移したので、44歳のヴェサリウスは、故郷を離れ、妻と一人娘と共にスペインに移ることになる。

スペインは、医学の面ではまだまだ保守的であり、ヴェサリウスは、スペイン人の宮廷医師団の中では部外者として孤立していた。胸中には、パドヴァでの大学教授の生活に戻りたいという思いがきざしていたようである。1561年、フェリペ2世の息子を死から救った、そのすぐ後、パドヴァ大学教授のファロピオ (Gabriel Fallopius, 1523-1562) の著した『解剖学所

見』(Observationes anatomicae, 1561, ヴェネチア刊)が、ファロピオの元弟子によってヴェサリウスに届けられた。ファロピオはヴェサリウスに会ったことはなかったが、その著作にはヴェサリウスの継承者となる意思と彼に対する尊敬の念が現れていた。ヴェサリウスはその年の終わりまでには、ファロピオの著作に対する長い返事を書いた。だが、ヴェネチアの大使に託されたこの書簡が届いたとき、ファロピオはすでに亡くなっていた。

そして、2年後の1564年、この書簡がヴェサリウスの最後の著作としてヴェネチアのフランセスコ書店より出版された。『ファロピオの解剖学所見に対する試論』(Anatomicarum Gabrielis Fallopii observationum examen, 1564)しかし、ヴェサリウス自身は、完成された書物としてこの本を見ることはできなかった。ヴェサリウスが、ヴェネチアに寄ってこの著作の刊行を決めたのは、スペインを発ってエルサレム巡礼へ向かう途中であった。

そして、エルサレムからの帰途、船は嵐に遭って難破し、イオニア海上のザンテ島で病死するのである。49歳であった。

なぜ、この時期、エルサレムへ巡礼の旅へ向かったのかは謎である。スペインでの生活に嫌気がさして、または健康上の理由から、宮廷侍医の職を辞す口実であったかもしれないし、パドヴァ大学教授職への復帰を望んでいたのかもしれない。現在ではおおむね否定されているものの、この謎について、様々な風説が流布した。さる高貴な婦人を検死解剖した際、その心臓が動いていた、贖罪として、エルサレムへ巡礼に出た、といった類の話である。

たとえ、そのような事実があったにせよ、それがヴェサリウスであるという証拠はない。だが、こうした話はヴェサリウスのエルサレム行きと結び付けられ、彼の死を伝説的に彩ってきた。

フランスロマン主義の系譜に連なる異色の小説家である、ペトリュス・ボレル(Petrus Borel, 1809-59)の作品に、「解剖学者ドン・ベサリウス マドリッド」(Don Besalius anatomiste - Madrid)という短編がある^{††}。

^{††}ボレルの小説はこの短編のみ、洪澤龍彦氏によって邦訳されている。(『洪澤龍彦翻訳全集4』河出書房新社、1997)

『シャンバヴェール、悖徳コント集』(1833)に収録されているもので、ヴェサリウスを題材にした伝奇小説だが、内容は史実と全く異なり、うら若い花嫁と結婚したヴェサリウスが、花嫁の間男を地下室で次々に解剖していくという恐ろしい小説である。小説としての評価はともかく、この短編の末尾に史伝として、先ほどのヴェサリウスに関する風説が添えられているのである。

3 オポリヌス書店

ファブリカの刊行に際して、バーゼルのオポリヌスが選ばれた経緯は不明だが、ヴェサリウスも執筆に加わった完全版『ガレノス全集』が、ヴェネチアのジュンタ (Giunta) とバーゼルの同じく有名なフローベン (Froben) とで、ほとんど同時期に刊行され、二つの大書店が独占されてしまった影響も推定されている。だが、オポリヌスを選んだのはそれだけでもないようで、ファブリカ刊行に対するヴェサリウスの情熱からしても慎重に書店を選んだと思える。オポリヌスは、一風変わった経歴の持ち主であった。

バーゼルの貧しい芸術家の家庭に生まれ育ったオポリヌス (Johannes Oporinus, 1507-1568, 本姓 Herbst) は、ストラスブルクにある貧しい学生のための寄宿学校で古典語を学び、バーゼルのフローベンの書店で校正などを担当していた。その後、しばらくの間、バーゼルの大学でラテン語、後にはギリシャ語を教えており、またヘブライ語の知識もあった*。しかし、学校の規則の変更でその職を辞すことになり、ヴェネチアと並んでヨーロッパの書籍印刷の中心地であったバーゼルで印刷、出版業を営む。ヴェサリウスがその手紙で、“バーゼルのギリシャ語(文学)教授、オポリヌス”と呼んでいるのはその経歴の故であろう。また、彼には、著名な医者パラケルスス (Paracelsus, 1493-1541) のもとで医学を学んだ経験があった。その仕事ぶりは正確で、ファブリカにはページ付けを除けば、ほとんど誤植はないという。またなかなかの冒険家でもあったようで、ヨーロッパ初のラテン語版コーランの出版を試みて、刑務所に入れられたりもして

*ファブリカはラテン語で書かれているが、ギリシャ語、ヘブライ語の用語も使われている。

いる。ファブリカ刊行はその財政的な面からも一大事業だったが、オボリヌス自身もファブリカの刊行が、その図版の意味も含めて画期的な仕事であることを十分認識していたようである。その後、ファブリカ第2版の刊行もひきうけていることから、ヴェサリウスとオボリヌスとの強い信頼関係があったと考えられている。

4 解剖図，および扉絵について

ファブリカはすぐれた科学者と芸術家の協力によって誕生したといわれるように、あるいは、ファブリカが科学書として偉大なだけでなく、書籍印刷史上においての傑作と賞されているのは、素晴らしい木版画の解剖図があるからに他ならない。

公開解剖の図を描いた扉絵、ヴェサリウスの肖像画を初めとして、古代ギリシャ彫刻やルネッサンス期の絵画から様式を模倣してポーズをとったともいわれる全身骨格図3葉（口絵）、全身筋肉図14葉（口絵）（骨格人、Bone-man、筋肉人、Muscle-man と呼ばれている）などがとりわけ見事である。

ファブリカ刊行の前にすぐれた解剖図を描いた画家として、レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci, 1452-1519) が存在する。ファブリカの挿図がレオナルドの剽窃であるといわれたこともあったようだが、実際には、レオナルドの解剖手稿は刊行されることなく、長くコレクターなどによって秘蔵されたままであった。レオナルドの手稿が広く世に知られるようになったのは20世紀に入ってからである。レオナルドはパヴィア大学の解剖学者マルカントニオ (Marcantonio della Torre, 1481-1512) と解剖学の共同研究を行っており、マルカントニオがペストによって死亡しなければ、あるいは、ファブリカのような解剖学書が著された可能性も推定されている。ルネッサンスにおいては、レオナルド、ミケランジェロなどをはじめ、画家の側から人間を正確に描くためにその内部（解剖図）を描く試みがなされた。レオナルドの解剖図からの直接的影響は証明できないにせよ、ルネッサンス美術においての画法や精神が間接的にファブリカに影響を及ぼしたことは十分ありうるだろう。

ファブリカの木版画の作者については、長い間様々な説が取りざたされてきた。作者をめぐる見解については、サンダース (J.B. de C.M. Saunders) とオマリー (Charles D. O'Malley) の共著である『The illustrations from the works of Andreas Vesalius of Brussels』の中から概略を紹介する。ファブリカの解剖図は18世紀頃までは、おおむねルネッサンス期の著名な画家であるティツィアーノ (Tiziano Vecellio, ?-1576) の作であると思われていたようで、1640年に、ドミニクス・ボナヴェラ (Dominicus Bonavera) によって刊行された『ティツィアーノの解剖図』 (Notomie di Titiano) の中には、ファブリカの版木からおこした図版 (骨格図3葉と筋肉図14葉) が含まれていた。その後もファブリカの図版は、17世紀、18世紀の出版物の中でティツィアーノの作として紹介されている。

ところが、19世紀になってヴァザーリ (Giorgio Vasari, 1511-1574) の『美術家列伝』 (Le vite de' più eccellenti pittori, scultori et architetti italiani, 1550, 2nd ed. 1568) *の中にヴェサリウスのために図版を描いた画家としてヤン・ステファン・ファン・カルカール (Jan Stefan van Kalkar, 1499-1546/50) の名があることが知られるに至って、にわかにはファブリカの図版の作者はカルカールであるという説が有力になった。邦訳から一部引用すると“何人かいた弟子のなかで、一人、ジョバンニ (訳注: ヨハネス・カルカール) というフランドルの画家が側近にいたが、肖像にかけては素晴らしい腕であったこの人の手になるものとして解剖の図がある。これは立派なもので、後世にも尊重されるにちがいない名誉ある仕事である。この図を版に彫らせ、彼の作品とともに外部に送って発表したのはアンドレ・ヴェザレである。彼は真に立派な人であった²¹⁾。”

『6図譜』の骨格図の画家がカルカールであることは、その最初のパラグラフの中でヴェサリウスが“3点の骸骨を描いた現代のすばらしい芸術家”として賞賛しているのであるから、そのように考えるのも当然のことであろう。しかしながら、唯一の文献証拠であるヴァザーリの当該記述の部分には、木版を銅版とするなどの誤りがあり、また、『美術家列伝』の初版にはこの記述がなく、カルカールの死後約20年ほど後の1568年の再

*日本では、『ルネサンス画人伝』(正統2冊)および『ルネサンス彫刻家建築家列伝』として分かれて白水社より翻訳刊行されている。

版に付け加えられていること、あるいは、『6 図譜』の骨格図をカルカールの作とすれば、ファブリカの図版と技術的レベルがあまりに違うこと、ファブリカの図版は時間的にも異なった複数のアーティストの手になると推定されていることなどから、現在では、解剖図をカルカール個人の作とすることには疑いが持たれている。

ヴァザーリの記述には“肖像画にかけては素晴らしい”としてカルカールを紹介していることもあり、ヴェサリウスの肖像画については、おおむねカルカールの作であると推定されているが（ヴェサリウス本人の作であるという説もある）、その他の図版については、カルカール個人ではなく、ヴェサリウスを含む、カルカールおよびティツィアーノの工房の弟子たち何人かの共同製作[†]であろうといわれている。ただ、連続したパノラマとして14葉の筋肉人の背景に描かれたパドヴァの風景のみは、その特色あるマニエリスムの作風からティツィアーノの工房で風景を担当していたドメニコ・カンパニョーラ (Domenico Campagnola, 1500?-81) の作であると推定されている。

扉絵についても、前掲書の中で、サンダースとオマリーによる図象の分析がなされているので、ここにその一部を紹介すると、パラディオ様式の野外の建物で公開解剖を行っているのはヴェサリウス自身であり、前面にいる古代のローブをまとった3人の姿は黄金期をあらわしている。解剖台の下に追いやられているのは、解剖を担当していた理髪師。そして犬と猿とが描かれているのは、ガレノスの解剖学を現している。中央上部の骨格標本は、ヴェサリウスの解剖学が骨から始まったことを示している。また、標題の書かれたコリント式の柱の上のエンタブラチュアの装飾部には、ヴェネチア共和国の紋章であるライオンとパドヴァ大学の紋章である牡牛が描かれ、その上には、二人のプットーに支えられた3匹のいたちを描いた楯がある。これは、ヴェサリウスの名前といたち (Wessels) が似ていること、および、修行時代に小動物を解剖していたことなどから、ヴェサリウス家の紋章であるとされている。また、その紋章の脇のバルコニー

[†]ルネッサンス時代の絵画制作は、彫刻や建築、印刷、その他様々な分野と同じように、親方を中心とした徒弟制の工房による共同製作が通常であった。また、絵の具の材料となる顔料は薬屋が扱っていることから、画家は、医師・薬種業のギルドに属していた。（『ルネッサンスの芸術家工房』ブルース・コール、ベリかん社、1996）

の右側にいるのが、印刷者オポリヌスであり、左側のドア、あるいは窓にはギリシャ文字 Φ(Phi)のようにオポリヌスの頭文字 I と O を交差させた組み合わせ文字が見える。

サンダースとオマリーの分析はさらに細かく、またファブリカ第二版の扉絵との違いにも論及しているが、ここでは省略する。

5 ファクシミリ版の不思議

ファブリカの書誌事項を調査するにあたって、貴重書庫に収められた原本をそう頻繁にめくるわけにもいかないなので、まず、明大生田図書館で所蔵しているファブリカ初版のファクシミリ版を用いた。このファクシミリ版は1976年に講談社より485部の限定出版されたものである。内容と図版の双方から小川鼎三氏と坂本満氏による詳しい日本語解説の冊子が付されている。ファブリカ初版のファクシミリ版は、1964年にブリュッセルの Culture et civilisation 社より刊行されており、未確認だが、講談社本はこの版を用いて、日本で出版したものと思われる。

ファブリカのページ付けや図版の確認などを行っているうちに、妙なことに気づいた。クッシングによるファブリカの詳細目録* を読むと、その構成はまず扉絵(タイトル頁)があって、カール5世への献呈文、オポリヌスへの手紙と続き、その次にヴェサリウスの木版肖像画が来ることになっている。折記号*6にあたる冒頭部分を引用すると、“*1a frontispiece-title; *1b blank; *2a-4b preface to Charles V...; *5 letter to Oporinus ... ; *6a portrait(sometimes inserted facing *2a); *6b blank”となっている。これによれば、時折、ヴェサリウスの肖像画が扉絵のあと、カール5世への献呈文と向かい合わせに挿入されている版はあるものの、冒頭に来るのは扉絵である。この順序は第2版も同様である。明大所蔵本の肖像画は、このとおりではなく、*6aがブランクで*6bに肖像画があり、本文と向かい合わせになっている。従って、肖像画の位置については、いくつかの異版が存在するとしても、最初に来るのは扉絵である。だが、講談社刊のファク

* 『A bio-bibliography of Andreas Vesalius』 2nd ed. Harvey Cushing (Archon Books, Hamden, 1962)

シミリ版では、ヴェサリウスの肖像画が本を開いた冒頭に登場するのである。付属の日本語解説を読み直してみると、前半の小川鼎三氏の解説には、扉絵、献呈文、手紙、肖像画の順になっており、初版原本と一致する。ところが、後半の坂本満氏の解説では、“自画像の次が標題頁で、”というように講談社刊のファクシミリ版の順序に従っている。したがって、明大本だけが違っているわけでもないようだ。

憶測に過ぎないが、戦前からヴェサリウスを研究し、おそらく、オリジナル版も眼にしているであろう小川氏は、このファクシミリ版を見ずに解説を著し、西洋美術の専門家である坂本氏は講談社刊のファクシミリ版を参照したのだろうか。

また、古代から近世までの西洋解剖学の歴史を概説した『人体解剖のルネサンス』（藤田尚男，平凡社，1989）において、ファブリカを紹介する章の中に“最初のページに、まずヴェザリウスの像が載せられ、次のページに…解剖し示説している絵がある”という記述がある。著作の内容を損なうものではないが、著者が講談社刊のファクシミリ版を参照した可能性を示している。

その後、ブリュッセル刊のファクシミリ版を見る機会があったが、こちらはオリジナル版どおりの順番であった。何故このようなことになったのかはわからないが、手に入りにくいオリジナル版を忠実に復刻してこそ、ファクシミリ版の意味がある。このような間違いがあったのは残念である。

6 明大所蔵本，および国内外の所蔵について

装丁は、茶色の子牛皮による比較的新しい製本。縁がかなり擦り切れているが、中身は保存状態良好。旧蔵者は勉強熱心だったらしく、随所に書き込みがみられる。当館が受入れた際に、裏表紙に登録番号を印字したOCRラベルを貼付してしまったのが惜まれる。巻末索引の後には、旧蔵者の手書きによる“蔵書票”がある。

Ex libris Nicolai Debleucourt

と読めるが、どのような人物かは不明である。

ファブリカ初版は、1983年の調査によると、世界に154冊現存するそうである（内134冊が図書館などに所蔵されており、残りは古書店の目録などによる）。そして1995年に弘前大学医学部の松木明智教授が調査したところによると、日本には7冊存在するそうである⁹⁾。

この初版7部の所蔵機関の内訳はわからないが、NCによる検索と今回の紹介文を書くにあたって、参考文献に出てきた所蔵などを挙げてみると以下ようになる。

- ファブリカ初版（慶應義塾大学図書館¹⁷⁾，札幌医科大学図書館，明治大学図書館）
- ファブリカ第2版，1555年刊（労働科学研究所ゲッティンゲン文庫，九州大学，二宮陸男氏個人蔵¹³⁾）
- ファブリカ第3版，1568年刊 所蔵なし？
- ファブリカ第4版，1604年刊（東京大学）⁷⁾

なお、1999年10月に開催された雄松堂書店の稀覯書展には、ガラスケース越しに見た限りでは原装版と思われるファブリカ初版が出展されていた（公式な値段は出ていないが、おそらく2000万円以上であろう）。買い手がついたかどうかは不明である。

7 研究書について

ヴェサリウスの伝記的，また，著作の書誌学的研究は熱心に行われてきた。文末の参考文献一覧と一部重複するが，その研究史的側面ともなるので，主たる研究書，翻訳書を挙げておく。（雑誌論文は省略した）

7.1 国外

1. 『Andreas Vesalius Bruxellensis』 Moritz Roth（Georg Reimer, Berlin, 1892）
バーゼル大学の解剖学教授モーリツ・ロートによる詳細なヴェサリウスの伝記。

2. 『A bio-bibliography of Andreas Vesalius』 Harvey Cushing (Schuman's, New York, 1943) (Yale Medical Library. Historical library publication, no. 6)
伝記的記述も含んだ、驚くほど詳細なヴェサリウスの著作の書誌であり、クッシングの亡き後、その未完の手稿が、John F. Fultonらによってまとめられ刊行された。長く絶版となっていたが、1962年に正誤表と補遺をつけたファクシミリ版が2nd ed.として Archon Books(Hamden, Conn.)より刊行されている。
3. 『Andreas Vesalius' first public anatomy at Bologna, 1540 : an eyewitness report : together with his notes on Matthaues Curtius' Lectures on Anatomia Mundini』 Baldasar Heseler, Translator: Ruben Eriksson, (Almqvist & Wiksell, Uppsala, 1959)
1540年、ヴェサリウスがボローニャ大学に招かれて、モンディーノ(Mondino dei Luzzi)の解剖学の継承者であったコルチ(Matthaeus Curtius)の解剖学の講義とヴェサリウスの解剖示説を組み合わせた講義が企画された。そのときの様子をヘスラーというドイツ人医学生が書き残しており、その手稿がエリクソンによって英訳されたものである。
4. 『The illustration from the works of Andreas Vesalius of Brussels』 J.B. de C.M. Sanders, Charles D. O'Malley (Dover Pub., New York, 1973, 1st ed. 1950)
『ファブリカ』『エピトメ』『瀉血書簡』『解剖学6図譜』からの図版を集め、図版についてのヴェサリウスの解説を英訳して付したものである。これには、伝記と図版についての解説が付されており、本稿を書くにあたっては、伝記、また特に図版の紹介に、主としてこの解説を使用させていただいた。
5. 『Andreas Vesalius of Brussels, 1514-1564』 C.D. O'Malley (Univ. of California, Berkeley, 1965).
これは、1.のロートの伝記を補完するものとして、新事実を付け加えて書きおろされたヴェサリウスの伝記の集大成ともいえる500頁に

及び労作である。巻末には豊富な原資料が英訳されて付されている。

6. 『On the fabric of the human body : translation of De Humani corporis fabrica libri septem』Translator: William Richardson, John Carman, (Norman Pub., San Francisco, 1998-)
ファブリカの完全英訳をめざして、現在Book IIまで刊行された。Book VIIまで全5冊で刊行の予定である。かつて西洋の知的文化圏ではインターナショナルであったラテン語は現在では、一部の研究者などを除けば読む人のほとんどいない言語となってしまった。そのため、ファブリカから450年後の現在では、ラテン語から英訳がなされているわけだが、この仕事に携わっているのは、1539年のガレノス全集に似て、現役の医者（解剖学者）と古典学者である。

7.2 国内

1. 『生物科学の創始者ヴェサリウスの生涯』内山孝一（中央公論，科学シリーズ2，1949）
日本大学医学部教授であった著者は、ヴェサリウスの生涯とルネッサンスを描くにあたって、その序文で、戦後まもないわが国の文化的現状をも重ね合わせて思いを巡らせており、著者のヴェサリウスへの思いが伝わってくる非常に誠実な伝記である。しかし、この伝記は、前出のロートの著作を参考にしており、現在では資料的にはやや古くなってしまった。また、当時、国内にファブリカ初版の存在が確認されておらず、労働科学研究所所蔵ファブリカ第2版を元にしてしている。
2. 『アンドレアス・ヴェサリウス人体構造論解説』（講談社，1974）
研究書とはいえないが、講談社刊のファブリカファクシミリ版に付した小川鼎三氏と坂本満氏による日本語解説。
3. 『人体構造論抄 - ヴェサリウスの the Epitome - 』中原泉訳（南江堂，1994）
近代医学の原典450周年記念出版として刊行されたエピトメーの日

本語翻訳版。

4. 『謎の解剖学者ヴェサリウス』坂井建雄（ちくまプリマーブックス，1999）

本稿を書いている最中に出版された。著者は順天堂大学医学部解剖学教授。「解剖学」の立場から考察したヴェサリウスの伝記，およびファブリカの研究書である。ファブリカ以前の解剖図やレオナルド・ダ・ヴィンチの解剖図も紹介，解説されている。また，著者は，前出のオマリーによるヴェサリウスの伝記を日本語訳出版準備中とのことである。

ヴェサリウスの研究書については，当館で近頃購入を始めたファブリカの英訳版とファクシミリ版を除けば，明治大学図書館では一冊も所蔵していない。資料の閲覧には，相互貸借，紹介状，および雄松堂のゲスナーライブラリーにお世話になった。医学図書館ではないのだから，所蔵していないのも当然といえば当然だが，このように貴重な資料を所蔵している以上，関連する文献や研究書，翻訳書も収集するべきであろう。

参考文献

- (1) 『A bio-bibliography of Andreas Vesalius』 2nd ed. Harvey Cushing (Archon Books, Hamden, 1962)
- (2) 『The illustrations from the works of Andreas Vesalius of Brussels』 J.B. de C.M. Saunders and Charles D. O'Malley (Dover Pub., New York, 1973, c1950)
- (3) 『Andreas Vesalius of Brussels, 1514-1564』 C.D. O'Malley (Univ. of California Press, Berkeley, 1965)
- (4) 『One hundred books famous in science based on an exhibition held at the Grolier Club』 Harrison D. Horbit (The Grolier Club, New York, 1964)

- (5) 『Andreae Vesalii De humani corporis fabrica』ファクシミリ版(講談社, 1976) および付属の「アンドレアス・ヴェサリウス人体構造論解説」小川鼎三, 坂本満
- (6) 『人体構造論抄 - ヴェサリウスのthe Epitome - 』 中原泉訳 (南江堂, 1994)
- (7) 『生物科学の創始者ヴェサリウスの生涯』 内山孝一 (中央公論, 1949)
- (8) 『人体解剖のすべて: 解剖学への招待』 坂井建雄 (日本実業出版社, 1988)
- (9) 『謎の解剖学者ヴェサリウス』 坂井建雄 (ちくまプリマーブックス, 1999)
- (10) 『医学の歴史』 小川鼎三 (中公新書 39, 1964)
- (11) 『解体新書: 蘭学をおこした人々』 小川鼎三 (中公新書 165, 1968)
- (12) 『図説医学史』 マイヤーシュタイネック, ズードホフ共著 (朝倉書店, 1982)
- (13) 『医学史探訪: 医学を変えた100人』 二宮陸男 (日経BP社, 1999)
- (14) 『レオナルド・ダ・ヴィンチ「人体解剖図」女王陛下のコレクションから』 マーティン・クレイトン, ロン・フィロ共著 (同朋舎出版, 1995)
- (15) 『人体解剖のルネサンス』 藤田尚男 (平凡社, 1989)
- (16) 『解剖の美学』 荒俣宏編著 (リプロポート, 1991)
- (17) 『アナトミア: Anatomia : ダヴィンチから解剖図譜の歩み』 (慶應義塾大学図書館, 1997)
- (18) 『アラビア文化の遺産』 ジクフリト・フンケ (みすず書房, 1982)
- (19) 『十二世紀ルネサンス』 C.H. ハスキンス (みすず書房, 1989)

- (20) 『ルネサンスの芸術家工房』 ブルースコール (ペリかん社, 1996)
- (21) 『ルネサンス画人伝』 ヴァザーリ (白水社, 1982)
- (22) 「解剖学者ドン・ベサリウス」 ペトリュス・ボレル (渋澤龍彦翻訳全集 4, 河出書房新社, 1997)